

## 報 告

---

# 大学入試の危機管理

—東日本大震災の経験から

倉元直樹\*

\*東北大学高等教育開発推進センター

## Crisis Management for University Entrance Examinations: What Should We Learn from the Experiences of the Great East Japan Earthquake?

Naoki T. Kuramoto \*

\* Division of Research in Higher Education, Center for Advancement of Higher Education, Tohoku University

The Great East Japan Earthquake was the most horrendous natural disaster in the history of modern Japan. Japan lost thousands of precious lives. Moreover, the people of Japan have to endure the cruel consequences of the serious accident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station. Decades of continuous effort will be necessary to solve the various problems resulting from the radiation.

The focus of the present paper is the Phase 2 individual freshman entrance examination of the Japanese national universities, which was originally scheduled for one day after the earthquake and tsunami. It was the final step of the last chance for 2011-school-year-bound university candidates to obtain enrollment in a national university. Universities located in the stricken area were compelled to handle this situation without knowing what to do, with most lifelines unavailable and no help from the outside world. The present report describes our experiences over several days, from immediately after the earthquake, in order to make this anecdotal information available to those in the future.

We start with the story of a high school where approximately 200 people survived the tsunami. Miyagi Agricultural High School was located about half a mile from the seashore in the Sendai Plain. Two days prior, Miyagi prefectural high schools had held entrance examinations and they were making reports for enrolment decisions. Only the head of the admission team concentrated on protecting the computer containing the records. All the other staff members effectively cooperated to save their own lives.

In contrast, Tohoku University had trouble with communication systems due to damage caused by the earthquake, even though it escaped damage from the tsunami. It was difficult for the university to inform candidates of its decisions without the electrical tools usually employed. The several-minute drive distance between campuses cut off the communication between the headquarters and other staff members. It is imperative that we learn the proper measures to avoid such obstacles to dealing effectively with such crises.

**Keywords :** University Entrance Examinations, Crisis Management, Earthquake, Tsunami

**キーワード :** 大学入試, 危機管理, 地震, 津波

---

\* 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内28 東北大学入試センター

Correspondence concerning this article should be sent to: Naoki T. kuramoto, Admission Center, Tohoku University, 28 Kawauchi, Aoba-ku, Sendai, Miyagi, 980-8576, Japan.

E-mail: ntkuram@m.tohoku.ac.jp

## 1. 序

2011 (平成 23) 年 3 月 11 日 (金) という日付は、長年にわたって日本に暮らす全ての人々の胸に深く刻み込まれることになるだろう。この日に発生し、後に「東日本大震災 (the Great East Japan Earthquake)」と命名されることになった大災害は、午後 2 時 46 分に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波によって引き起こされたものである。地震の規模もマグニチュード 9.0 と日本における観測史上最大を記録した。津波の高さも最大遡上高 40 メートルを超えたと言われている。日本では前代未聞の規模である。少なくとも戦後、場合によっては明治以来、戦災を除くと最も甚大な被害を引き起こされた災害と言ってよいだろう。死者・行方不明者数は 2 万名に達すると言われているが、それ以前に戦後最大の大災害と目されてきた 1995 (平成 7) 年 1 月 17 日 (火) 発生の阪神・淡路大震災における人的被害の約 3 倍に達する。震災の発生からどれほど時間が経っても、なかなか被害の全体像を明らかにすることすらできない状況である。

東日本大震災の最大の特徴は、天災に加えて福島第一原子力発電所の事故が加わったことである。そのため、純粹な天災と言うよりは半ば人災の印象を人々に与えている。また、結果として極めて長期間に渡って直接的、間接的な被害の発生が続くことになってしまったが、本稿の主題とは大きな関わりはないので、その問題については必要に応じて簡単に触れるだけに止める。また、この震災のもう一つの特徴は、震災直後の段階において津波による被害が他の原因による被害を圧倒的に上回ったことである。被災の当事者にとっては、地震直後の状況において、津波の直接的被害に加えて被害に関わる情報の多寡、被災状況に関わる認識も様々な判断に大きな影響を与えたものと思われる。

なお、本稿は、東日本大震災の体験を契機に大学入試の危機管理について感じた、筆者の雑感を記述したものである。あらかじめ、筆者の所属する東北大学の公式見解とは一切無関係であることをお断りしておく。

## 2. 津波被害と高校入試

大学入試について触れる前に、高校入試に関わる一つのエピソードを紹介する。

図 1 は、東日本大震災における宮城県農業高等学校の様子を撮影したものである<sup>1</sup>。まさに校舎を水没させる勢いで押し寄せてくる津波を、隣接する別棟

---

<sup>1</sup> 本節の記述は、主として 2011 (平成 23) 年 5 月 10 日 (火) に行った宮城県農業高等学校主幹教諭市山直之氏との懇談のメモから筆者がまとめたものである。図 1 も市山



図1 宮城県農業高等学校を襲う津波

の校舎の屋上に避難した同校の生徒、教職員が、茫然と不安げに見つめている様子が写し出されている。

宮城県農業高等学校（以後、「宮城農業」と略記する）は宮城県立の農業系専門高校であり、農業科・園芸科、生活科、食品化学科、農業機械科の5コース、各学年6クラスの規模である。所在地は、宮城県名取市下増田字広浦20-1、仙台平野の海沿い、閉上(ゆりあげ)浜のすぐ近くに位置している。震災直後、津波に襲われるニュース映像が繰り返し流れた仙台空港からは北北東2 kmほどのところにあり、海岸線まで1km弱程度といった位置関係である。幸い、震災時に同校にいた者の中から犠牲者は出なかった。しかしながら、校舎は1階部分まで津波で完全に水没するという被害を受けた。そのため、震災後は宮城県内の三つの高校<sup>2</sup>で分散して授業を行うなど、困難な状況下での学校運営が続いている。

---

氏の許可により、掲載するものである。本稿の執筆、および、写真掲載を許可して下さった市山氏に心から感謝する。なお、記述内容に関する全ての責任は筆者にある。

<sup>2</sup> 宮城県柴田農林高等学校、亶理高等学校、加美農業高等学校の3校。往復3時間ほどかかるので、送迎のバスの中でも授業を行うなど、不自由な環境の中での学習を強いられてきたが、2011(平成23)年9月1日から、農業・園芸総合研究所(宮城県農業大学校名取教場)の敷地に建設された仮設校舎に移転したとのことである。

## 2. 1. 津波に襲われた宮城県農業高等学校の状況

東北地方太平洋沖地震が起こる2日前の2011(平成23)年3月9日(水)、振り返ってみるとその前兆だったのではないかと思われる、比較的大きな地震が起こった。地震の発生時刻は午前11時45分、震源地は三陸沖の深さ約10kmの地点、マグニチュードは7.2で、最大震度は5弱、宮城農業が立地する宮城県中部では震度4を記録した。当日は、ちょうど宮城県の公立高校一般入試の当日に当たり、地震発生時は3時間目の社会科のテストが行われていた。各学校では所定の危機管理対応マニュアルに沿って受験生の安全確保の措置を行い、試験時間の延長措置等を取って試験を継続した。

そして、その2日後に襲ったのが東日本大震災ということになる。宮城県農業高等学校では、東日本大震災の日は採点、集計が終了し、合否判定の資料を作成しているタイミングであった。データの入力が終わり、入試担当の教頭に対して一つ目の学科の資料説明を終えたところだったという。データを入力したノートパソコンを素早く机の下に降ろし、揺れが収まるのを待った。作業をしていた会議室の中では物品が飛んだり倒れたりがあったが、大きな被害はなく、地震に対しては校舎も無事だった。しかし、前々日の地震とは揺れ方が全く違ったために、即座に教職員の間では「津波が来るのではないか」という懸念が脳裏に浮かんだそうである。大震災の当日、生徒は自宅学習日だったが、農場実習や部活動のために学校に来て、校内に止まっていた者が多数いた。2日前の地震は、多少大きかったものの日常的に時々起こる地震の一つとしか感じられず、対応にも余裕があった。しかし、この時は全く違った感覚だったという。その場にいた教員は素早く役割分担を決め、校内各所に散っていた生徒たちに避難指示を出した。実習施設を抱える宮城農業の敷地は広い。農場では液状化が起こり、あちこち泥水が噴水のように吹きあがっていた。

生徒はA棟からC棟まで3棟並んで建っている教室棟のうち、B棟の3階に集められた。今は携帯電話の時代である。当然のことながら、携帯電話のワンセグ機能を使ってニュースを見ている生徒もいた。大方が3階に避難した時点で、すでに南三陸町や女川町には津波が到達していた。名取へは高さ5~6mの津波が午後3時40分頃に到達するだろう、という予報が入っていたが、どの程度のものなのかがピンとこない。とりあえず、万全を期すために3階から屋上に上がることにしたという(図1左側)。雪がちらつく寒い日であった。そこにしばらく止まることを想定し、ストーブなど、後に必要になるかもしれないと思われる物品を3階に上げておいたが、結果的にそれが功を奏した。

津波到達予想時刻までにはしばらく時間があつたので、教職員の中には物品

を探しに校舎に戻った者もいた。その時、実習棟である C 棟（図 1 右側下）を津波が襲った。押し寄せてくる圧力はものすごく、アルミの扉をぶち破って水が入ってくるのが見えたそうである。結果的に全員無事だったが、あと数秒逃げ遅れていたら…という教職員も何人かいたとのことであった。

津波は 3 波に分かれてきたが、第 1 波と比べると第 2 波が極めて大きかった。その第 2 波が引きかけたとき、その高さを上回る第 3 波が押し寄せて来るのが見えた。もう、どこにも逃げようがない状況の中、そこにいた全員が給水塔（図 1 左奥）によじ上って避難したそうである。給水塔に上るためには小さなハシゴがあるが、それを使っていたのでは間に合わなかったので、3 階から机を持ってきてそれを台にして、女子生徒から順に給水塔に引き上げた。とにかく、何とかしてそこに集まっていた 200 名弱全員が給水塔に上り切った頃、空から雪が舞い降りてきた。そして、それと同じ頃、引き波が押し波を相殺して圧力が小さくなった。第 3 波が松林（図 1 右側）に到達した頃から津波が引いていった。給水塔には 1 時間以上止まったが、大丈夫と確認したうえで 3 階に引き上げることにした。

毛布なども必要だったが備蓄がなかった。そこで、教室のカーテンをちぎって毛布代わりにした。2 階、3 階は教室棟となっており、体育着等が廊下のロッカーには入っていた。とにかく誰のものでもいいから取り出して、生徒にはまとわせられるものをまとわせた。農業系の高校の利点は備蓄米があったことである。化学室や理科室からは、ろうそく等が集められた。灯油は貴重だった。1 階に灯油タンクの貯蔵庫があった。波はかぶっていたが、灯油が少し残っていた。運動部にもわずかながら飲み物や食べ物があり、運よく流されなかった物や流されながらも拾ってきた物で一晩を過ごすこととなった。米はお粥にして、一人につき茶碗 1 杯位の炊き出しができたそうである。

翌朝、いまだ津波警報が解除されてない中で脱出が始まった。夜、漆黒の闇が不安をかきたてたが、朝になって太陽が昇り、周囲が明るくなってきた。それにつれて希望も湧いてきた。決断のきっかけは、震災当日、校外勤務だった実習助手が学校まで来たことである。仙台空港アクセス鉄道の最寄り駅まで車で来て、学校に様子を見に来てくれた。その時点では、相当先の場所まで津波が到達したのではないかと推測していたが、想像したよりも冠水地点が手前で止まっていたこと、膝まで水が引いていたことが脱出可能という判断につながった。脱出経路に関する情報ももたらされた。受け入れ先は近くの小中学校で探すこととし、生徒には足に履くことができるものはビニール袋だろうが、他人の靴だろうが、とにかく履かせて脱出した。駅の駐車場に集合し、そこでい

ったん解散して、徒歩で帰宅可能な者、家族と連絡がつく者は自宅に帰らせた。それ以外は近くの小学校へ向かい、独身の教員が中心になって付き添って、もう一晩宿泊することとした。

## 2. 2. 入試データの死守

津波被害に見舞われた宮城農業はこのように極めて切迫した状況下に置かれていた。その中で高校入試に関する情報がどのように扱われたのかということが、本稿の主題に関係するテーマである。

入試のデータは、通常は、答案も含め、全ての資料が厳重に金庫に保管される。地震が起こった時点で受験票と調査書は金庫に保管されていたが、判定会議のため、答案は金庫の外に出た状態だった。その結果、答案自体は津波で流され、失われてしまうこととなった。

入試データに関しては、教職員は皆が十分に意識していた。ただし、全員が「入試、入試」と意識しすぎて行動し、例えば、散乱した答案の収集などに掛かっていたら、誰かが津波の犠牲になっていた可能性が高かったと思われる状況だった。教務部長が入試に責任を持つということで、入試データが入力されていたパソコンを大切に抱えて避難した。結果的に、現場で即断して決めたそれぞれの役割分担はうまく機能した、との自己評価であった。

後から振り返って見たところでは、震災があと1日前に起きていたとしても、あと1日後に起きていたとしても、入試データは失われていたはずである。1日前であれば、まだ採点が完了していなかった。また、1日後は土曜日だったので、資料を持ち出すのは不可能だっただろう。タイミングの問題として合否判定資料を無事に持ち出すことができたのは、かなりの幸運であった。

その後、入試関係のデータは、教務部長が自宅近くの高校に保管してもらうこととした。パソコンを持ち出すことには成功したものの、実際にデータを読み出せるかどうかの確認はできていなかった。最終的にパソコンに異常はなく、入力されたデータは無事に打ち出すことができたので、それに基づいて合否判定が行われた。宮城県が取り決めた合格発表日（3月22日[火]）からは1日遅れることになったが、宮城農業も無事に2011（平成23）年度入試の合格発表を完了するができた。

## 2. 3. 入試の社会的重要性

もしも入試データが津波で流されて全て失われていたら、高校入試はやり直しになっただろう、というのが大方の見方のようなのである。しかし、これだけの

状況の下では、再募集も何もできないということもまた事実なのである。

高校進学率が 90%に達し、事実上の全入時代と言われるようになったのは 1970 年代半ばのことである。それから 40 年近くが経過した現在でも、実際には高校入試は社会的に極めて重大な関心事としての扱いを受けている。さもないければ、人命が掛かったこれだけ深刻な事態の下でも、既に実施された高校入試の結果が無事に発表できるように、これほどの神経とエネルギーが注がれる必要はなかっただろう。津波で校舎が流されるほどの被害を受けた宮城農業で、何事もなかったかのように合格発表が行われたことは、特段の注目を引くことはない。逆に、入試のやり直しというような事態に陥ったとすれば、一つの事件のように扱われたことだろう。当事者としてはこれほど理不尽な話もないだろうとを感じるが、それが現実である。

そして当然のことながら、それは大学入試に注がれている周囲の眼差しにも通じるものなのである。

### **3. 東日本大震災の下での東北大学の入試**

#### **3. 1. 東北大学の学部入試における危機対応**

東北大学の学部入試はアクシデントに鍛えられてきたと言っても過言ではない。近年は何事もなく無事に終わることの方が稀であり、毎年、何らかの容易ならざる事態が起こり、その都度、何とかして危機をくぐり抜けてきたという実感がある。

例えば、2008(平成 20) 年度入試のことである。一般入試前期試験の個別試験前日は、大荒れの天候となった。北海道が特にひどい暴風雪に見舞われ、飛行機が離発着できない状態に陥った。そこで、まず、東北大学では北海道から出願があった 129 名の志願者全員に個別に連絡を取り、その状況を把握することに務めた。その結果、試験開始時間を 1 時間繰り下げることを決断し、試験場に向かっていった志願者全員の受験を無事に実現した。この時、筆者自身は何の役にも立たず、実施本部の見事な采配に心の中で拍手喝さいを送るのみであった。

さらに、2010(平成 22) 年度入試には新型インフルエンザ問題が持ち上がった。メキシコで豚の間で流行していたウィルスが 2009(平成 21) 年 4 月に人に感染したことが確認され、さらに人から人への感染力を持つに至ったことから、またたく間に世界中で大流行することとなったという事件である。日本でも、同年 5 月 9 日(土)に海外から帰国した高校生の感染例が確認されたのち、一気に感染が拡大した。死亡例も出たが、不幸中の幸いと言うべきか、鳥イン

フルエンザのような強毒性のウイルスではなかったために、感染の広がり割に重症化率は高くならなかった。また、大流行したにもかかわらず、季節性インフルエンザの流行期である厳冬期までには感染も一段落して話題に上ることも少なくなり、大きな社会問題に発展することなく終息して行った。このときに入試に関連して持ち上がった難題は様々であったが、中でも東北大学における主だった懸案事項を挙げると、大学入試センター試験（以後、「センター試験」と略記する）の追試験実施に関わる問題、追試験の日程変更に伴う入試実施の問題、個別試験追試験の対象者数予測と追試験実施時における公平性の問題である。

共通1次時代を通じて、毎年、センター試験の追試験は本試験1週間後に行われてきた。例年、東京と大阪に1会場ずつが設けられる。ところが、2010（平成22）年度入試では新型インフルエンザの大流行に備えて各都道府県に追試験会場が設けられることになり、それに伴って追試験実施日が本試験の2週間後に設定されることとなった。

東北地方で最大の総合大学として、追試験を引き受ける覚悟は備わっていたが、問題はその規模にあった。宮城県では予想受験者約1万名の1割、1千名規模の体制を整えることが要請された。ところが、折悪しく、2009（平成21）年度は大規模な校舎の改修工事が実施され、それに伴って全学教育が変則日程となっていた。通常であれば休業日となる土曜日にも授業が行われており、新たに設定された追試験予定日の2010（平成22）年1月30日（土）も授業実施日に当たっていた。授業と並行して、これだけ大規模な教室と人員を確保するには大きな困難が予想された。

また、追試験が本試験の2週間後に設定されたことも大きな波紋を投げかけた。東北大学にはセンター試験を利用する「AO入試Ⅲ期」と呼ばれる入試がある。10学部中8学部で実施されており、定員の上でも小規模な入試ではない。これは、前期試験の前に実施されるため、極めてタイトなスケジュール管理が要求される。例年でも、ほとんど余裕のない日程で運営されているにもかかわらず、追試験が1週間遅れるとなると、センター試験成績の情報提供もその分遅れることになる。結局、当初予定されていた2月3日（水）の成績提供が2日遅れることになり、入学者選抜要項を通じて公表されていた第2次選考実施日を1日繰り下げることで決着を見た。

センター試験と個別試験の追試験対象者の予測には、過去のセンター試験の追試験対象者数の情報が活用された。センター試験の追試験受験許可者数は、1973（昭和58）年度の114名が最少、例年は多くても300名程度であり、1979



(昭和 54) 年度から 2009 (平成 21) 年度までの 31 回の平均値は 189.6 名であった。1995 (平成 7) 年度は季節性インフルエンザの大流行に当たっていて、例外的に 972 名もの追試験許可者を出したことがあった。全受験者数に対する割合にすると、例年は 0.1%未滿, 1995 (平成 7) 年度でも 0.186%と 0.2%に届かない。平均値は 0.060%である。おおよその追試験対象者数予測と言う目的に鑑みると厳密な試算である必要はない。要は、どの程度の規模で追試験を準備すべきなのかを見積もることができればよい。そこで、センター試験の前例を手掛かりに、例年の実績から想定受験者数を割り出し、ポアソン分布を仮定した試算を行った。その結果、追試験対象者が 100 名を大きく上回る規模となる可能性は、限りなく小さいと予測された。その規模であれば、現実的な対応が可能である。不可能を可能にする意味で独自予測は役立った (倉元・安藤, 2011)。

最後に残った課題は、個別試験において追試験を実施した場合の公平性の確保である。検討の結果、本試験、追試験双方の対象者が共通に受験するアンカーテストの結果を利用して得点の調整を行うタッカーの方法 (Kolen & Brennan, 1995) を応用した調整方法が採用されることとなった。短期間で確実に処理できることを考えると、ルーチンで算出しているパラメタのみで処理することがプログラムの実装を可能にし、ミスの危険性を小さくする要件と考えられた。入試データを用いて計算するパラメタは個別試験本試験の平均と標準偏差、および、センター試験と追試験の平均のみとなった。過去 10 年間の入試データを用いてシミュレーションを繰り返した結果、前期日程の文系、理系、後期日程の文系、理系それぞれで調整を行う条件となる追試験受験許可者数の最低人数を割り出し、準備に着手した (倉元, 2011)。結局、センター試験の追試験受験者は 13 名に止まり、個別試験では追試験を実施することはなかった。大山鳴動鼠一匹、といった結末だったが、リスクマネジメント (risk management) の観点からは上出来だろう。

その他、出題ミスで記者会見に至ったようなケースもあったが、西郡・倉元 (2009) の分類によれば、「パターン 16」という最も軽微な段階で止まっている。

2011 (平成 23) 年度には、京都大学の一般入試前期日程試験で携帯電話を利用したカンニングが発覚してマスコミで大々的に報道された結果、全国の大学で蜂の巣をつついたような大騒ぎになっていた。東北大学でも実施可能な範囲でカンニング対策を立て、後期日程個別試験に備えていた。

### 3. 2. 地震発生直後の対応

2011 (平成 23) 年 3 月 12 日 (土) は、国立大学の一般入試後期日程試験における個別試験の実施日に当たっていた。その前日に東日本大震災が起こった。入試にとって、このタイミングは決定的にクリティカルな意味を持つ。アクシデント発生のタイミングに応じて、入試の実施担当者が必然的に対応しなければならないミッションが変わってくるからだ。先述の宮城農業では、高校入試実施日の翌々日、合格発表を控えた時期に津波に襲われたことから、担当者が命がけで入試データを守ることとなった。2008 (平成 20) 年度入試の悪天候は、個別試験実施の前日から発生していたため、入試実施日の延期を含めて「全ての受験生が試験実施に間に合うように試験開始時間を調整する」ことが課題となった。阪神大震災は、センター試験本試験実施 2 日後の各大学への出願が始まった時期に発生した。追試験会場の追加に関しては前頁の注釈に記した通りであるが、おそらく、大学入試関係者は答案の所在確認に追われ、各大学の入試担当者は震災被害に遭った受験生への特別措置の準備を行ったものと思われる。そして、繰り返しになるが、東日本大震災の発生は一般入試後期日程試験個別試験の前日であり、同時に前期日程試験の入学手続き最終日でもあった。以上の事項を念頭に、ここからは、筆者個人のストーリーにお付き合いいただきたい。

#### 3. 2. 1. 地震発生時の状況

3 月 11 日 (金)、筆者は日帰り日程で、東京で開かれたある学会の会議に出席していた。会議は午前中に終わった。昼食を取って仙台に戻り、新幹線を降りて仙台駅を出たのが地震発生直前の午後 2 時 44~45 分頃だったと思われる。東北大学では、現在、後期日程試験を実施しているのは経済学部と理学部の 2 学部のみである。数年前までは全学部が実施していたが、その頃と比べると実施体制は縮小され、筆者自身は後期日程入試実施業務からは免除されていた。通常であれば、帰宅のためにローカル線に乗っていたところだが、その日は珍しく街中で私用を済ませてから帰ろうと仙台駅西口から外に出た。仙台駅西口の 2 階から続くペDESTリアンデッキを渡って、仙台のメインストリートである青葉通に向かおうとして歩いていた。街路に降りる階段まであと 10~20m くらいというところまで来たときのことである。突然、デッキが尋常ではない横揺れを始めた。周囲を見渡すと通行人は皆、一様にその場にしゃがみこんでいた。筆者もその場に腰を降ろしながら、漠然と自分を空中に支えているペDESTリアンデッキの床が抜けたら「怪我だけでは済まないかな？」などと思っ

ていた。不思議に恐怖や不安は感じなかった。

そのうち、10mほど先にある地上とデッキを結ぶエレベータが2階で止まっており、扉が開いているのが目に飛び込んできた。揺れが小休止した瞬間、エレベータに向かって猛然と走り出していた。実は、この時、念頭に浮かんだのが、数週間前に起こったニュージーランド、クライストチャーチで発生した地震の際のエピソードである。倒壊した語学学校が入ったビルの下敷きになって日本人学生数十名が犠牲となったことが繰り返し報道されていたが、建物の中でエレベータホールだけが、壊れずに残っていた。そのニュースを思い出したのである。目の前の十数階建てのビルは、大きくしなっており、今にも窓ガラスが粉々に砕けて自分の頭に降って来そうに思えた。とっさに、「床が抜けたりガラスが降ってきたりした場合にはエレベータに飛び込んだ方が安全だろう。その中に閉じ込められた方が、外にいるよりも助かる確率が高そうだ」と考えたのである。

しばらくはエレベータの入口にしゃがんでじっとしていた。揺れが収まるまでにはかなりの時間が経過したように思えた。仙台駅方向に目をやると、屋上の駐車場に止まっている車が大きく揺れているのが見えた。駅舎近くにいると落ちてくる車の直撃を受けるのではないかと思った。そうこうしているうちに、揺れが収まった。床が抜けることもガラスや車が降ってくることもなく、階段も倒壊していなかったの、とりあえずはほっと胸をなでおろした。

階段を通過して無事に通りに降り立つと、ビジネススーツ姿の多数の男女が中央分離帯に身を寄せ合うように集まっていた。おそらく、通りの両脇の建物からできるだけ遠くに逃げようとしたのだろうと思った。往来していた車はその場で停車していた。営業中のタクシーも目に止まった。この時、一瞬、脳裏をよぎったのは3年前の出来事である。2008(平成20)年6月14日(土)の朝、「岩手宮城内陸地震」が発生した。奇遇にも、筆者はその日も北海道からの出張帰りに当たっており、仙台空港に降り立ったのが地震発生直後というタイミングであった。ターミナルビルから外へ出ると、アクセス鉄道の駅には途方に暮れた人ばかりが見えた。筆者は目の前に止まっていた空車のタクシーを止め、いち早く自宅へと向かった。結果的に自宅付近に地震の被害はなく、家族も無事であった。この日も一瞬、この場でタクシーを拾って自宅に帰ろうかと考えたが、後期入試の前日であることを思い出した。とりあえず、研究室に向かうこととした。この判断は結果的に大正解であった。と言うのは、この時タクシーに乗って自宅に向かっていたら、結果的に津波に突っ込んで行った可能性が高かったと思われるのだ。

### 3. 2. 2. 仙台市中心部の様子

後になってつくづく感じるのは、大規模な災害の現場には必要な情報が入って来ないものだという事だ。今回の大震災も実感を持って状況が理解できたのは、ずいぶん後になってからである。気持ちも状況判断も大きく揺れ動いた時期があった。通信が途絶すると被害や問題の全体像が全く分からない。自分の目に入ってくる状況を手掛かりとして、事態を推し測ることになる。可能な限り後知恵を排除して、その時その場で何を感じていたのかを出来るだけ正直に思い返すと、ずいぶんとおかしなことを考えていたものだと思う。

職場に向かうことを決めて、まず、地下にある市営の自転車置き場に向かった。通勤に使っているマウンテンバイクに類するタイプの自転車を取りに行くためである。周囲は静かであった。注意深く周囲を見渡しながら歩いていたら、一つとして倒壊した建物は目に入らなかった。主観的には自転車を取りに地下に降りて行った時に最も恐怖感を覚えた。明かりが消えた駐輪場と地下道の圧迫感に、言い知れぬ不安がかきたてられた。

研究室までは自転車で20分ほどの距離である。駅からは西、すなわち、海とは反対側に向かうことになる。通りには人もほとんど歩いておらず、信号で止まる必要もなく、自転車で移動するには、通常よりもむしろスムーズであった。途中、街灯が倒れていたり、道がデコボコになっていたところもあったように思うが、広瀬川に架かる橋も特に危険を感じることもなく渡ることができた。改めて周囲を見渡しても倒壊した建物は皆無であった。植木鉢が倒れていたり、壁が少しはがれ落ちたり、ガラスが割れているといった程度の被害を受けた建物は散見されたが、見た目にさほどひどいものとは感じなかった。その時点で、「津波」という発想は一切頭に浮かばなかった。阪神大震災ほどの被害ではないな、というのがその時の率直な感想であった。後から考えると不謹慎極まりないが、従来から必ず起こると言われてきた宮城県沖地震がこれで済んだのであれば、むしろ良かったのではないかとさえ思ったほどだった。研究室は入試課と同じ「東北大学入試センター」の建物の中にある。そのとき建物で勤務していた教職員は全員無事で、私が到着したときには外に一時退避していた。しばらくは余震が続いたので、建物に入るのは危険と感じられた。寒空の下、しばらくはなすすべなく、建物の周囲で余震が収まるのを待つしかなかった。

その頃、行動を共にしていた入試課職員の中で、携帯電話のワンセグ機能を使ってテレビを見ている者が何人かいた。地震のニュース、それに加えて津波

のニュースが流れ、ようやく事態の深刻さが伝わってきた。しかしながら、その時点では、それらは単なる「情報」に過ぎなかった。皆、不安や恐怖を表に出すことはなく冷静だった。それは事態を受け止めてのことだったのか、実感として目の前の現実と結びつかないただけだったのか。改めて問うてみると、正直なところよく分からない。内線電話は通じなくなっていた。その場にいた多くの者が携帯電話を使って家族に連絡を試みていたが、電話やメールは時折つながったり、しばらくつながらなくなったり、という状況だった。

### 3. 2. 3. 翌日の後期日程個別試験実施の取りやめをめぐって

実施本部会議が行われる予定時刻の16時になった。会議のメンバーは揃わなかった。実施本部長となるはずの教育担当理事も現れなかった。

ここで東北大学のキャンパスと入試関連組織について簡単に説明を加えておくことにする。大学によってはほとんどの機能が一つのキャンパス、一つの地区に集中している場合がある。ただし、比較的大規模な大学では適切な例が思い浮かばない。一方、異なる機能を担う複数のキャンパスが離れた街に分散して立地している大学も珍しくない。例えば、山形大学は、本部や理学部などの三つの学部が位置する山形市のメインキャンパスと、農学部がある鶴岡市のキャンパスとは通常でも片道約2時間の距離、工学部のある米沢市のキャンパスとは新幹線を使っても1時間はかかる距離である。こういったキャンパスの構造の違いによって、大学の管理運営の実務も相当に変わってくるのではないかと思う。山形大学ほど距離が離れていれば、一つひとつの小さな案件について全てのキャンパスから人が集まることは難しいだろう。そのための工夫は日頃からなされているのではないだろうか。他方、一つのキャンパスに機能が集中していれば、アクセスに大きな労力を割くことはない。

東北大学のキャンパスは、「集中型」と「広域分散型」の中間、言わば「市内分散型」である。主な機能は仙台市内の五つのキャンパスに分かれ、さほど大きくはない仙台市の中心部を取り囲むように散らばっている。通常は車を使って15分もあれば行き来ができる。実習施設などの例外を除き、キャンパス間の距離が運営の障害として意識されることはほとんどない。本部のある片平キャンパスと入試センターの位置する川内キャンパスも、車で10分以内の距離感覚である。

ところで、東北大学入試センターは学部入試全般を所掌し、形式的には大学院入試にも関与することになっている責任重大、かつ、実務負担の大きな部署である。それにもかかわらず、学内的な組織上の位置づけはそれに見合うもの

ではない。高等教育開発推進センターの一部門である高等教育開発部、さらにその一セクションである入試開発室の業務センターという立場なのである。入試開発室は筆者自身を含めて専任教員3名の小さな所帯である。当然、入試の実務は実行部隊としての全学的な委員会組織と各部局に設けられている学部入試に関わる委員会、そして、裏方を担う教育・学生支援部入試課によって運営されている。すなわち、実務上の大きな実体に対して、掲げられている看板が著しく小さいという珍しい組織なのである。

状況が少しずつ見えてきて、自分たちがその場でやるべきことが明確になった。まずは、翌日の試験を取りやめることを決め、それを受験生に知らせなければならない。試験前日ということで、会場下見に来ている者もいたが、地震が発生した時間帯にはほとんど残っていなかった。受験生に対する現場での対応は皆無ではなかったが、避難誘導に大きな労力を割くほどではなかった。後期日程実施学部の責任者も入試センターに駆けつけ、翌日の入試が予定通りにできないことの確認を求めてきた。至極当然の行動なのだが、一つ大きな問題があった。翌日の個別試験を強行できないことだけは明らかなのだが、誰の責任でその決定を行ってよいのかが分からない、ということである。発表の仕方にも細かく神経を使う必要があった。「延期」と表現すれば「代替日を決めて後日実施する」と受け取られるだろう。「中止」と表現すれば、「個別試験はとりやめになり、今後も行われない」という意味に取られるかもしれない。

入試センター長が駆け付けてきた。とりあえずは、入試センター長の権限で、予定されていた翌日には入試を行わないことにすること、今後のことは後日協議をして発表することが決められた。その旨を大学の執行部に伝えなければならない。しかし、道路はすでに大渋滞、車を使うことはできない。混乱の中、入試課長がとりあえず翌日の個別試験取りやめの決定について承認を取りつけるため、片平キャンパスにある大学本部に自転車で向かって行った。

後で分かったことだが、実施本部長となるはずだった教育担当理事は、地震発生時点では大学本部にいたらしい。即座に災害対策本部を立ち上げ、陣頭指揮に当たっていたようだ。当時の状況からみて、ことの軽重を判断した場合、即座に判断すべき重要な懸案事項が次々に上がっている様子が想像できる。翌日の入試といった些事に関わる余裕がなかったことも理解できる。通常であれば、近くの誰かと電話1本やり取りするだけで状況は伝わる。また、通信機能がマヒしていたとしても、同じキャンパス内であれば、誰かが歩けば数分で往来できる。しかし、今回のケースでは実質的な距離と組織上の問題が重なり、何とも現場で動きにくい状況が生まれてしまった。「大学にとっての学部入試」

とは何か、ということの認識の共有は重要な課題だと思われる。入試は世間一般から見て分かりやすい大学の表看板である。上手く行って当たり前、ほめられることはない。問題が起こったときにはよく目立つ。処理を誤ると後に長く尾を引き、組織に傷が付く大問題となる。宮城農業のケースでは、教職員の間でその共通意識が徹底されていた。大いに見習うべき部分があると感じる。

後期日程試験が予定通りに行われるか否かは、言うまでもなく翌日の受験生にとって極めて重要、かつ、必要な情報である。ただ、今回のケースではそれ以上の意味が込められていた。電池でも作動する携帯用ラジオが用意された。断片的ながらも震災に関する情報が入ってくるようになった。その内容は、周囲の状況から推し量ることができる範囲をはるかに超えた、想像を絶するものだった。大学のサーバも停止しているようだった。「外の世界」から見たとき、東北大学は壊滅したと思われる可能性があると考えた。したがって、この大災害の下で入試中止情報の発信を行うことは、大学が依然として無事に存在し、機能していることを示す唯一の「生存情報」になるのではないかと、そう考えるに至った。

実際に着手できたことは以下の三つであった。最初に行うべきことは極めてアナログな作業であった。それは試験場に翌日の入試が中止である旨の掲示を出すことである。万が一、予定通り受験のために試験場に来る受験生がいるとすれば、彼らには確実に「中止」を伝えなければいけない。しかし、個別対応に割り当てるだけの人員はない。掲示は絶対に必要だった。入試課職員の動きは実に俊敏であった。模造紙に手書きという形ではあったが、比較的簡単に掲示はできあがった。

二つ目はマスコミを通じて入試の中止を公表してもらうことであった。メディアによる発信は大学の「生存情報」として重要だと感じられた。この点では大学の事務組織の通常のラインが機能した。担当部署である広報課がマスコミとのコンタクトを失っていないという前提ではあったが、入試課長が本部に顔を出すときに広報課を通じてマスコミに知らせてもらうように依頼すればよい。しかし、平常時であればともかく、人命の根幹に関わる重要な情報が飛び交う状況で、たかだか一大学の「入試」という人の生死に一切関わらない内容が、メディアに載せてもらえるとは思えなかった。

ところが、後日人づてに聞いたことであるが、震災当日すでに、東北大学の入試中止の情報もニュースとして流れていたとのことであった。筆者個人の意見としては、緊急時の情報発信のプライオリティとして大いに疑問を感じるところだが、大学入試が如何に社会的に重大関心事と思われるかを端的に示

すエピソードである。

第三点目、これが最も重要であり、同時に実施困難なものであった。それは、入試の中止情報を個別の受験生に届けることである。平成 20 (2008) 年度入試の天候によるアクシデントの際のように、通常の意味での確実性を担保しつつ一人ひとりの受験生にコンタクトを取るのとは不可能だった。入試課職員の誰かが知恵を出したのだと思う。大学に関する情報を発信する民間サイトの携帯用の掲示板を利用することになった。東北大学のページに「入試中止」の情報をアップロードするのである。この方法は、受験生の多くに情報を届けられる可能性があるのみならず、東北大学が「外の世界」に発信する「生存情報」として確実に機能するという利点もあった。ここで大きな威力を発揮したのが、筆者が所有するノートパソコンであった。日頃から出張が多い生活をしているので、出先でのメールのやり取りと持ち込み仕事は日常である。パソコンの内蔵バッテリーは常に予備を用意して持ち歩いている。また、プリペイドのデータ通信も必携アイテムである。不十分ながらも、電車で移動中にポータブルな仕事環境を作ることができる。先述したように、震災は日帰り出張から仙台駅に帰りついた時点で発生した。通常であれば、新幹線の中でパソコンを開けて何らかの作業をしてきたところであった。ところが、なぜかこの日に限っては車中で仕事をする気にはならず、パソコンは東京から閉じたままであった。バッテリーも一本は半ば使用された状態だったが、一本はフル充電されている。データ通信も機能していた。

夕刻が近付いてきた。停電は続いており、それが早々に復旧するとは考えられなかった。日没前には作業を終わらせなければならない。大きな余震も頻繁に起こっている。寒さのためか、それとも余震への恐れのためか、担当する入試課職員の指先は、肉眼ではっきり分かるほどに震えていた。データ通信をつなぎ、半ばまで作業が進んだときに余震が来る。その都度、急いで建物の外に退避するが、通信が切れてしまう。もう一度最初から作業をやり直さなければならない。それを何度繰り返したことだろうか。懐中電灯で手元を照らしながらの作業となった。辛うじて翌日の入試中止のメッセージを携帯サイトにアップし終えたときには、戸外はかなり暗くなっていた。

もう一つ、大事な作業が残っていることに思い至った。今後の対応に関する段取りである。とりあえず、翌日の入試実施が不可能なことは明らかであった。しかし、その後は何をすべきなのか。大学で独自に何を決めてよいのか、判然としない。とにかく、監督官庁である文部科学省に連絡を入れておいた方が、後々、面倒なことにならなくて済むだろうと考えた。電話も FAX も通じない。



デスクトップのパソコンも電源が入らないので、頼りになるのは筆者が所有しているノートパソコン一つということになる。とりあえず、筆者のメールソフトを使って入試課長から文部科学省の担当者にメールを送り、指示を待つこととした。

これにて思いついた範囲で当日できることは全てやり終えた。翌日 11 時に駆けつけられる者が同じ場所に集まる約束をして、その日は解散となった。筆者は帰りがけに入試センターの建物に戻り、研究室に入った。書棚から本が落ちて散乱し、ぐちゃぐちゃになっていた。何とか机にたどりついて引き出しを開けた。その中から分析用に借用していた過去の入試データが入ったハードディスクを取り出した。万が一、大きな余震が来て建物が崩れてもデータだけは残しておかなければならないと考えたからである。「それに、どこかで何かの役に立つかもしれないし…」ふとそう思った。

### 3. 3. その日の夜の出来事

#### 3. 3. 1. 帰宅

帰宅の途についてのは、午後 6 時頃であっただろうか。陽は完全に落ち、周囲は暗くなっていた。道路は大渋滞である。歩いて自宅に向かうしかない。しかし、筆者はその点では相当に恵まれた条件下にあった。それは、通勤用の自転車を手にしていたことである。入試課にストックしてあった携帯用の使い捨てカイロを分けてもらって自転車にまたがり、自宅に向かった。

筆者は仙台という街がかなり気に入っている。理由の一つは、その空間的なゆとりにある。大きな祭などの、例外的にたくさんの人が集まるイベントを除き、好きな方向で好きな速度で歩いても他人の迷惑にならない。そうかと言って、さびしくなるほどに人がいないわけではない。その適度な「ゆったり感」が仙台の街の雰囲気を作っている。さすがにこの日はそういうわけにはいかなかった。信号が消えた車道は車が詰まって動けない。ただ、歩道は自転車にまたがっても前に進むことができた。なぜか、ところどころに信号機が点灯している交差点もあったが、基本的に周囲は真っ暗である。人の気配は分かるが道路の細かい状況までは分からない。その中で自転車をこぐのは無謀だったかもしれない。仙台駅付近が通行不能になっているとの情報が入ってきたので、駅を迂回して、自宅へと続く東北地方太平洋沿岸の大動脈国道 45 号線に入ってしまった頃であった。後輪が溝にはまった。バランスを失い、身体が思い切り左方向によれた。福引の景品で当たった自転車なのでお世辞にも頑丈とは言えない。後輪が曲がって動かなくなってしまった。仕方なくブレーキを引き

ちぎった。タイヤがフレームに当たってまことに具合が悪いが、全く動かないわけではない。力を入れてこげば、歩くよりはましであった。

後日談であるが、震災から約2週間後、まだ生活インフラがほとんど戻っていない時期に、自宅近くの自転車店が開いているのを見つけて応急修理をしてもらった。老夫婦で経営している小さな自転車店である。持ち合せの部品を使って前はマウンテンバイク、後ろはスポーツタイプの車輪という世界で一つの珍妙な自転車になった。商店にはほとんど商品が入ってきていなかった。購入できる食料品は乏しかった。修理の代金に加え、お礼にインスタント食品を届けた。感謝された。後日、部品が入荷したら教えてもらうことにした。しかし、未だに連絡はない。自転車はしばらくそのままにしておこうと思っている。ある意味、筆者だけの震災モニュメントである。

地震直後に家族に携帯メールを打ち、妻からは返信があったので妻の無事は確認していた。しかし、その後は連絡が取れていない。高校生の一人息子からは連絡がない。さほど本気で心配していたわけではない。「マメに返信をよこすタイプでもないし、万が一、行方が分からなければ妻が必死に連絡を取ってくるだろう。何も連絡がないのだから、おそらく息子は妻と一緒にいるのだろう。」と考えた。「自宅に行けば何か手掛かりがあるはずだ」とも思った。携帯電話が鳴った。電話の主は大阪にいる友人であった。何度も連絡を試みて、ようやくつながったらしい。彼女との縁も奇遇である。元々は同じマンションの住人であった。子ども同士のつながりもあり、家族ぐるみのお付き合いをさせていただいていた。ご主人の転勤で遠くに転居してからも何かと心配してもらって互いに連絡を取り合っていた。最後の連絡は前々日の地震のときにパソコンにいただいたお見舞いメールであった。ふと思い立って自分の携帯電話のメールアドレスを連絡しておいた。それが早速役立った。会話と同じ内容のメールが届いた。2日後、津波警報騒ぎの際に妻とはぐれたときにも、彼女が中継して連絡を試みてくれた。妻の携帯電話の電池がなくなったこと、最後につながったときに避難所の場所を告げて電話が切れたことを教えてもらった。ただ、伝えられた避難所の位置が自宅からやや離れたところだったことが少し引っ掛かった。

帰宅途中の街の様子は意外と平穏だった。ビルのガラスが壊れて通行に注意が必要な場所があったものの、火災や倒壊した建物はなかった。いつしか、人通りもまばらになっていた。通勤に使っているローカル線で自宅まで3駅くらいのところまでたどり着いた。異変を感じたのはその時である。普段は感じたことがない異臭が漂い始めた。海の匂い、磯の香りである。それまで、情報と

しては頭に入っていた津波の話だったが、この時になって初めて自分自身にも関わりがある問題としてリアルに迫ってきた。最寄りの多賀城駅のひと駅前まで来た。駅前の交差点には水に浸かった痕跡があった。さらに進んでいくと進行方向から戻ってくる一群の人たちがいる。「この先は通れない」というようなことを口々に言っているようだった。自宅まであと5分。とにかく前に進むことにした。途中、途中、車が道端に止まっている。高速道路の高架下まで来たとき、文字通り、茫然とするしかない光景が広がっていた。車が道をふさぐように列をなしていた。なぜか整然と一列に並んで積み上がっているように見えた。それでも不思議なことに引き返そうという気が起きない。車と車の隙間をくぐって行けばその向こうには見慣れた日常が広がっているような気がしていた。

現実を受け入れるのに時間はかからなかった。その先が津波でやられていることに疑いはなかった。何とかして自宅に向かうルートを見つけなければならぬ。自宅はマンションの1階である。まさか、とは思いますが自宅は果たして無事なのだろうか？一抹の不安を覚えた。自宅が国道から見て内陸寄りにあることは好材料だった。とにかく、何が何でも我が家に帰らなければならない。普段、車でよく通る交差点はたつぷりと水に浸かっていた。強引に突っ切ろうと試みたがさすがに無理だった。寒空の下、身体を濡らすのは危険である。濡れないようにと心がけてきたが、ついにくるぶしまで水につかってしまった。しかし、すでに空腹も寒さも感じないようになっていた。

適当に路地に入った。通りがかった小学校は避難所になっていた。年配の男性が付近の道路地図を前に、張り切って道案内をしていた。電話で家族が避難していると聞いた中学校までのルートを探ねてみると、今、水に浸かって引き返してきた道を教えてくる。「自分の目で確かめてきたのか？いい加減なことを言うな！」本格的に口論になりそうになったが、ぐっところえてその場を離れた。今日はここに泊まることになるのだろうか？それは避けたかった。今日中に家族を探し出したいと思った。ともかく、仙台方面に戻って行けば、何とか自宅へのルートを見つけることができるかもしれない。そう思って避難所を後にした。

迂回ルートは意外と簡単に見つかった。500mほど戻ったところの道は無事だった。頻繁に車も通行していた。人も歩いていた。暗かった。どこにいるのか分からなかった。壊れた自転車人で避け、車をおかわしながら、片道1車線の狭い道を進むと、ようやく見慣れた風景に出会った。高速道路、鉄道、そして川にかかっているアーチ形の大きな橋を越えるとその先に自宅がある。人通

りは全くなくなっていた。壊れた自転車を押しながら橋の中央までさしかかった。一人の老婦人が椅子に腰をおろしていた。一旦通り過ぎたが、やはり気になる。戻って話を聞いてみた。仙台の街中から4時間かけて歩いてきたという。ご自宅の住所を尋ねてみた。近所ではあったが、私の自宅とは方向が違う。申し訳ないけれど…、とポケットに入っていた使い捨てカイロをお渡しして別れた。

### 3. 3. 2. 石油コンビナートの爆発

自宅近くの中学校の前を通り過ぎた。真っ暗だった。道路には人っ子一人いなかった。マンションにたどり着いた。もぬけの殻、という表現が適切かどうかは分からないが、70戸あまりの自宅マンションにも全く人の気配がしなかった。自転車から電池式のライトを引きちぎり、懐中電灯代わりに使うことにした。我が家の玄関には「避難完了」と書き記したマグネットが貼られていた。鍵を開け、自分の部屋に入り、濡れた靴下だけは取り換えた。退避すべき住宅に長居をしてはいけない気がした。ライトの光が気になった。「避難しているはずの家から明かりが漏れているのはまずいだろう」と思った。いずれにせよ、これから家族を探さなければならない。避難所として告げられた中学校の場所は正確には記憶していなかったが、駅を越えた向こう側にあるはずだ。駅まで行けば、自宅から最寄り駅までの通勤に使っているシティサイクル、いわゆる「ママチャリ」が置いてある。

自宅前の通りでは、筆者はただ一つ、光を放ち、動きがある存在だった。音は何も聞こえない。津波が運んできた海の匂いもそこまでは届いていなかった。最寄りの多賀城駅まで10分ほどの道のりに全く人の気配がしないのが、異様と言えは異様であった。駅は仙台港まで直線距離2kmほどの位置にあり、仙台港側に面した駅の表側には、線路に沿って砂押川という二級河川が流れている。駐輪場は駅の表側にも裏側にもあるが、筆者は自宅に近い駅裏の駐輪場を利用している。「懐中電灯」を手に入れておいたおかげで、自転車はすぐに見つかった。不思議なことに、自転車は朝置いたかたち、そのままでもそこにあった。あれだけ揺れに揺れた後なのに倒れもしていなかった。「この付近ではさほどの被害はなかったのかな？」そう思った。実際には、津波は駅の直近まで迫っていたのだ。砂押川の堤防が防潮堤の役割をして津波が川べりで止まっただけで、津波に飲み込まれるまで紙一重であった。駅を越えて川の対岸に行けば凄惨な光景が広がっていたはずだった。筆者はその惨状を2日後まで知らずに過ごすこととなった。あと1ブロック先を通っていれば状況が分かったはず

ずだったのに、何の偶然か、ママチャリを頼りに筆者が家族を捜しまわったルートは津波の被害があった場所をきれいに避けていた。暗闇の中、依然として街はひっそりと静まり返っていた。

おそらく、午後 8 時から 9 時の間の時間帯だったのではないだろうか、連絡された中学校にたどり着いた。そこには人影はなかった。一人だけ、校舎の前に立っている人を見つけた。状況を尋ねてみた。一旦は避難所になったが、津波の危険があるので、夕刻になってすぐ脇の坂を上ったところにある小学校に避難者が移されたという。本当は遅くともここで気付くべきだっただろう。筆者の息子がかつてお世話になった多賀城市立の中学校は、自宅から歩いて 5 分と離れていない。家族は自宅に最も近い避難所にいるはずだったのだ。それが思い浮かばなかったのは大いに反省すべきところである。危機管理の原則からすると、危機に際して、情報は正確さよりも迅速さが重要だという。情報を届けてくれた友人の責任ではない。少なくとも「妻が無事である」という情報は確実に届いていたのだから。錯誤の原因は以下の二点に集約される。一つは不確実かもしれないと疑ってしかるべき伝聞情報について、合理的に疑う姿勢に欠けていたことである。緊急時にギリギリの状況で、叫ぶようにして告げられた言葉を聞き違えることは大いにあり得る。それなのに、はなから完全に正確な情報だと思いこんでしまい、疑問を感じるべき心のセンサーが作動しなかった。もう一つは家庭人としての努力不足であろう。すなわち、自宅における緊急避難体制に関する理解がよい加減だったことである。知識としては、最寄りの中学校が避難所となる可能性があることは知っていたはずだった。しかし、日常からそれを真剣に心に刻み込んでおく心構えがあったかと言われると、言い訳できないものがある。何となく「津波の危険が迫って、今回の場合は避難所から外れたのだろう」などと都合のよい合理化をして、理解していたかもしれない。少なくとも、自宅に向かっていたときに、念のために立ち寄って中を覗いておくべきだった。幸運にも、この思い違いによって何らかの被害が発生することも拡大することもなかった。逆に、貴重な経験にもつながった。それはそれでよしとすべきだが、厳しく捉えるならば、極限の状況下での思いこみや確認不足は容易ならざる事態を招く危険性がある。通常以上に念入りの確認が重要だ。首尾よく済んだのは結果論にすぎないと考えるべきだと思う。

多くの人が高台にある小学校の体育館に避難していた。非常用の自家発電機が動いているようで、そこだけ明かりが煌々としていた。避難者に食糧が配給され始めたタイミングのようであった。やや殺気立った雰囲気があった。多少の躊躇を感じつつも、拡声器を持って指示をしていた人に家族の名前を呼んで

もらった。返事はなかった。教室にも避難者がいると聞いた。体育館から本校舎に移った。体育館とは異なり、校舎の中は真っ暗であった。手前の教室の戸を叩いた。小さな子どもや既に横になっている人もいたので申し訳ないと思いつつも、中を「懐中電灯」で照らした。家族の名前を告げ、呼んでもらった。どこにも見つからなかった。いくつ目かの教室で、その場にいた人に大阪の友人からのメールを見せた。「その地区の人はここにはいないはずだ」と言われ、勘違いが明らかになった。

途方に暮れて校舎を出たのは10時前頃だったと思う。校門の前で、もう一度自宅に戻ったものかどうかと思案をしていた。そのとき、突然、背後から「ボン」という花火に近い、しかし、若干こもったような爆発音が聞こえた。振り返ってみると、漆黒の闇にこれから吹きあがろうとする丸々とした炎のかたまりが見えた。一瞬、我が目を疑った。映画の1シーンに迷い込んだのではないのかと感じた。続けざまに爆発音がした。6～7ヶ所、その周囲に同じような爆発が起こったのを目撃した。またたく間に大きな一つの炎の塊ができた。暗闇で方向が分からない。実際には、2kmほど離れた場所だったようだが、すぐ目の前のような感じがした。なぜか、「多賀城駅が火を吹いた」と思った。子どもの頃ラジオで聞いて怖い思いをした新潟地震の話が思い浮かんだ。「結局、火事で死ぬんだな」と思った。とにかく、自転車をこいで、火と反対の方向に走った。あてはなかった。漆黒の闇の中、道も方向も皆目見当がつかなくなっていた。

ふと気付くと、よく知っている大通りに出ていた。国道45号線である。火災の方向を確認すると、最初に思い込んでいた多賀城駅方面ではなく、海寄りの方向に見えた。仙台港には石油コンビナートがある。「コンビナートの石油タンクが爆発したらしい」と気付いた。とりあえず、先ほどは通り過ぎてしまった自宅近くの中学校に向かうことにした。校舎の中まで入ってみると、そこにも多くの人が避難していた。片っぴしから教室の戸を叩いて探し回った。いくつ目であろうか、同じマンションに住む顔見知りの人に声を掛けられた。誰かが体育館で妻子を見かけたらしい、という話を教えてくれた。お礼もそこそこに教室を離れ、何とか体育館の場所を探し当てた。妻はすぐに見つかった。これだけ必死で探しまわったのに、それに見合うだけの緊張感が感じられなかった。少し癪に障った。聞くと、帰りがけに目撃した国道45号線の状況は全く知らなかったと言う。息子は妻の横に座っていた。全身から力が抜けた。

### 3. 3. 3. 不安な一夜

妻が避難所に入ったのはかなり早いタイミングだったようで、我が家は出入口に近い「一等地」を確保していた。息子にはメールに返信をよこさなかったことについて、とりあえず、一喝した。ただ、事情をよく聞いてみると、息子は息子でくるぶしまで水に浸かりながら必死で自転車をこいで自宅に逃げ帰ってきたのだという。ともかくは無事を喜んだ。同じマンションに住む二家族と一緒にいた。見知った顔は心強かった。このとき、初めてネクタイをしたままだったことに気付いた。やはり、普段の感覚ではなかったようだ。外そうとしたが、中々上手く外せない。こういうときはそういうものなのかもしれない。場が少し和んだ気がした。

避難所に「帰宅」してからも筆者の仕事は残っていた。それは、文部科学省からのメールを受信することである。パソコンの電源は貴重であった。「自分のものであって自分のものではない」と思った。翌日はこのパソコンの通信機能が威力を発揮するだろうと考えたからだ。できるだけ、バッテリーを節約しなければならない。通信ソフトを起動させ、メールソフトの受信トレイを見た。文部科学省からのメッセージが届いていた。「文部科学省としても情報収集中であり、後期日程試験に関する指針を出す予定はない」との内容であった。入試課長にその旨を携帯メールで連絡し、ようやく、その日の仕事が終わった。自分に対する安否確認のメールも何件か入っていた。返事はそこそこにして、貴重なパソコンの電源を落とした。実は、このとき、筆者の親しい知り合いに大変な迷惑を掛けていたことが後になって判明した。内蔵バッテリーの残量を気にするあまり「自分は無事」ということ以外、誰にも詳しい状況を伝えていなかったのだ。災害の現場には断片的な情報しか入って来ない。この震災の全体像がどれほどの規模であり、そのことを周囲がどのように認識しているのか、全く分からなかったし、そのことに気も行っていなかった。この時点では津波の映像もほとんど目にしていなかったため、周囲がどれほどの切迫感を持って心配してくれていたのか、考えが及ばなかった。この日、筆者が東京に出張していたことは、仕事関係者にはよく伝わっていたようだった。どこにいるのか？ 家族は無事なのか？ 自宅は大丈夫なのか…？ 筆者の自宅住所を調べ、被害状況と照らし合わせてくれた人も多かったようだ。数多くの友人、知人に大変な心配を掛けていたことは、しばらく後によりやく分かった。この場を借りて、心に掛けていただいたことに関する感謝と無用な心配をさせてしまったことに対するお詫びの気持ちを改めてお伝えしたい。こういった非常時には、自分や関係者はどこにいて、怪我をしているのか無事なのか、周辺の状況はどうな

っているのか、というような詳細で具体的な情報を最低一人には伝えておくべきだと悟った。誰か一人が情報を把握していれば、そこから他の知り合いへの伝達を頼むこともできる。

一方、関係諸機関からの連絡や問合せ、指示には入試課の担当者は相当に閉口したようだった。ようやく電気が復旧し、パソコンメールの機能が回復した時点で受信トレイを開いてみると、多種多様な内容の報告を求める連絡が山のように入っていて、その多くはすでに設定された回答期限も過ぎていたそうである。大規模災害の被災地は大混乱している。そもそも、担当者自身の身体、財産、その他にダメージが及んでいるかもしれない。無事であっても、日頃簡単にできることが出来なくなっている。処理できる仕事も効率は著しく落ちてしまう。まして、日常業務以上の付加的な業務への対応は、あまりにも大きな負荷が掛かる。優先的にやっておかなければならないことも多い。手は足りない。「外の世界」にいと、被災地の現場の状況が見えないのはよく分かる。しかし、報道では嫌というほど被害状況が流れていたはずなのだ。他人事ながら、さすがに気の毒に感じた。

避難所にはラジオがあった。断片的にニュースが入ってくる。どこか遠くの街でもコンビナートが爆発し、火災が起こっているらしかった。しかし、多賀城の話は流れて来ない。避難所では誰も石油コンビナートの爆発の話は知らないようだった。もしかすると、他により被害が大きい場所があるために、我々にも危険が迫っていることは「外の世界」には知られていないのではないか、そう考えたりもした。後から思い返すと非常に恥ずかしくなる言動がいくつも思い当たる。非常時ということで許されるものかどうかは分からない。他のことは省略するとしても、このときのことだけは正直に記録しておきたい。筆者は妻に車の状況とガソリンの残量を確認し、「この避難所は危険だから離れよう」と提案した。妻の方がよほど冷静であった。「危険が迫っているのならば避難所の管理者が把握しているはずだし、自分たちだけ勝手な行動は許されない」と説得された。それは、結果的にきわめて正しい判断だった。

体育館には全員が横になるスペースはなかった。妻と交替で横になってウトウトとするものの、長くは眠れず、頻繁に目が覚めた。身体は十分に疲れているので、眠りに入ることはできるが1時間おきに目が覚める。トイレに行くついでに廊下の端まで行くと、3階から炎の上端が見えた。次に起きたときには、2階の窓から炎が見えるようになっていた。幅も心なしか広がっている。「火災が徐々に広がりながら、少しずつこちらに近づいているのだろうな」そう思っていた。



### 3. 4. 個別試験の中止とセンター試験による合否判定に至るまで

#### 3. 4. 1. 避難所からの出勤

夜が空けた。職場に行かねばならない。通常であれば職場までは自転車と電車を使って1時間弱というところだろう。しかし、通勤手段はママチャリしかない。車とガソリンは貴重だ。「外の世界」に出るまで、ガソリンの補給は望めないだろう。最後の最後の避難の手段として確保しておかなければならない。ママチャリは歩いて行くよりは相当にましだが、睡眠不足と空腹で体力的にはかなり厳しい。一夜明けて、道路状況がどうなっているのかも分からない。どこかで新たに火災が発生しているかもしれない。職場までは3時間近くはかかるとみておいた方がよいだろう、と考えた。

8時を過ぎた。状況が分かるようになって、妻も漠然と不安を共有するようになったようだった。「どうしても行かなければならないのか」と妻が言う。「仕事だから当たり前だろう」と答えはした。しかし、相当に見栄と強がりが入っていた。なにしろ、明るくなった東の空一面にもうもうと黒煙が広がっている。それを背にして、自転車をこいで行かなければならないのだ。家族を残していくのが心配だった。家族を危険にさらしたままで、自分だけ安全な場所に逃げていくような後ろめたさを感じた。しかし、それでも行かねばならないと思った。そこに迷いはなかった。地震の直後、即座に帰宅していたら、この状況の中で出勤しようという発想が浮かんだかどうか。逆に言えば、地震直後の対応に加わったからこそ、現場の状況も職務の重要性も身に染みて理解できたのだと思う。それに、唯一の頼みの綱となる通信手段は自分が握っていると思った。選択肢はなかった。

通勤途中、身に染みて感じたことがあった。水分補給の重要性である。ポケットには飴が数個、自転車のかごに350mlのペットボトルに入った水が二つ。寒さは大した問題ではなかった。ずっと自転車をこぎつづけていると自然に身体が温まる。むしろ汗をかく。問題はすぐに足がつってしまうことだった。水分が不足すると足がつりやすくなる、という話は聞いたことがあった。しかし、避難所ではなるべくトイレは使いたくないものである。「出づるを制する」には「入るを制する」が一番。できるだけ水は飲まず、口に入れる食べものも最小限にして過ごした。その判断は仕方がなかったと思うが、体力的には厳しくなった。

ようやく、前日、自転車の後輪を壊したあたりを通り過ぎた。さらに少し先まで行った。遠くからけたたましい消防車のサイレンが聞こえてきた。見ると、

20 台ほどの消防自動車の隊列が自分の方に向かってきて、瞬く間に通り過ぎていく。消防隊が向かっている先には家族がいる避難所があり、その先には、昨晚、火を噴いた石油コンビナートがあるはずだ。車体には「東京消防庁」と書いてあった。震災以来、現在に至るまで、これ以上に嬉しく、勇気が出た瞬間はない。「自分たちは見捨てられていなかったのだ！」踊り上がる気分だった。コンビナート火災がラジオでニュースとして流れたのかどうかは分からなかった。しかしながら、いずれにせよ爆発の事実は「外の世界」に伝わり、だからこそ、そこから助けが来てくれたのだ。高速道路は使えないはずだから、東京から夜通し国道を走って、文字通り駆け付けてくれたのだろう。これは皆に知らせなければ。慌ててポケットに有ったカメラを取り出し、動画撮影した。「早く職場の皆に見せてやろう」そう思った。

### 3. 4. 2. 予想外の展開

職場である東北大学入試センターに到着した。パソコンを開いてみた時点で、誤算が見つかった。昨日は活躍したデータ通信が全く効かないのである。入試センター長も同じデータ通信のセットを用意していた。どちらも全く反応しない。おそらく、ローカルな問題ではなく基地局の機能の問題であろうという推測がついた。固定電話はもちろんのこと、携帯電話も全く反応しない。通信は完全に断たれた。何とか各方面と連絡を取り合いながら物事を決めておこうと考えていた目論見が早くも崩れた。センター試験を利用する入試の場合、大学入試センターと情報のやり取りをしながら様々な判断をする。この段階では大学入試センターとの通信回復も難しいように思われた。

ただし、同時に嬉しい誤算もあった。電源が確保できたのだ。入試課長が守衛室に掛け合い、貴重な自家発電装置を貸していただけることになった。「入試のため」という大義名分が利いたのであろう。これで、当面、電源の心配はなくなった。

この条件の下でできることは何か。電気、水道、ガスといったライフラインは全て断たれている。通信も壊滅している。まして、交通インフラはどこまで破壊されたか分からない。仙台港も仙台空港も津波でやられてしまった。受験生の安否は非常に気になるが、それも分からない。もしかすると、入試どころの騒ぎではない状況に置かれた受験生も多数いるのかもしれない。大きな余震が来て、さらに大きな被害を受けるかもしれない。例年通りに個別試験を実施するのは到底不可能だと思われた。よしんば、大学として入試実施の体制を整えることができたとしても、受験生の交通手段が確保できる見通しもつかない。

受験生の安全確保が可能かどうか分からない。

一つだけ、恵まれた条件があった。それは、大学入試センター試験の成績が入手できていたことである。他に手立てがない中では、センター試験の成績は非常に有力な資料であった。例年通りの入試が行えないならば、センター試験成績を主たる選抜資料として合否判定を行うのも合理的な選択肢の一つと感じられた。前日に持ち出してきた過去の入試データは手元にあった。個別試験を抜きにしてセンター試験で選抜を行ったとすれば、合格者層はどう変わるのか。どの程度の入学辞退者を見込んで合格発表をするべきなのか。十分な資料とはならないにせよ、そういった判断の基礎資料となる計算は不可能ではない。

通常の場合から考えると相当にもたついている感覚があった。時間が掛かった。しかし、何とか基礎資料を作成することができた。プリンタは使えないので、計算結果を手書きでホワイトボードに写して、検討を加えた。

暗くなる時刻よりは、かなり前に計算結果が出た。それを元に、入試センター長が対応策の原案を災害対策本部に具申し、他大学の意思決定に関する情報収集を行いながら最終的な結論を出すことになったと理解した。翌日は日曜日でもあり、次に召集されるまで自宅に待機することとなった。

帰り道、黒煙に向かって自転車をこいでいくのは、むしろ嬉しかった。家族と一緒にいたかった。危険があるのならそれを分かち合いたいと思った。戻ってみると、避難所に大型テレビが設置されていた。より詳細に情報が入るようになってきた。

### 3. 4. 3. 再び津波警報発令

翌日、3月13日の日曜日の朝は温かく穏やかな晴れの天気だった。息子を連れ出して、自転車で近所を回ることにした。万が一の避難ルートの確認と被害状況の把握をしておきたかったのだ。まず、多賀城駅に向かい、駅の表側の様子を見に行くことにした。砂押川は、多賀城駅の付近から河口まで少なくとも2 km以上の距離があるはずだった。ところが、河口から遡上してきたと見られる小型のボートが駅付近で裏返しになっているのが目に入った。信じられなかった。その先は、さらにひどいことになっていた。道路は泥だらけで、道端には壊れた車が何台も寄せられていた。ただ、すでに重機が入って整備がなされていたらしく、道の真ん中は車が通行できる程度の幅が確保されていた。しかし、とてもとても、その先まで様子を見に行く気にはなれなかった。

取って返して、付近で一番高い場所を確認することにした。さらに大きな津波が襲ってきた場合の緊急避難場所を確認するためである。その途中、石油コ

ンビナートに勤めている知り合いが犬の散歩をしているのに出会った。家族ぐるみで付き合いがある方なので、携帯メールで無事は確認していたのだが、顔を見て本当に安心した。震災直後の職場からの脱出の話を聞くと、まさにアクションドラマさながらであった。「九死に一生」とはこのことであろう。筆者の何となく間が抜けた「冒険談」とは緊迫感が全然違う。よくぞ無事でいられたと思った。一昨日の夜に目撃した爆発はアスファルトの材料で、石油系統のものではないので相対的に危険は少ないということだった。さらに、燃えながら海側に流出したのでこちら側に延焼する可能性は低いということだった。多少は気が落ち着いた。

避難所脇の坂を上り切った地点が、近辺では一番高い場所のようだった。坂の頂上付近はコンビニエンスストアの駐車場となっていて、スペースもある。万が一のときはその場所を目指して逃げることに決めた。

今度は妻と一緒に一時的に自宅に戻ってみた。避難所のトイレは、皆、きれいに使おうと努力しているものの、水が出ない中ではどうしても限界がある。時折、男手で一斉に屋上のプールからバケツで水を運んで行ったが、目に見えて衛生状態が悪くなっていくのが感じられた。トイレはできるだけ自宅で使った方が良い。自宅は1階にあるので、裏に小さな庭があった。そこに野良猫が寄ってくるので、妻が猫よけに何十本というペットボトルに水を入れて庭に並べていた。それが功を奏した。当面、節約しながらもその水をトイレに流せばよいだろう。冷蔵庫を開けてみると、意外にも冷気が漂ってきた。冬で気温が低かったことも幸いしたが、製氷皿に残っていた氷と冷凍食品が威力を発揮していたようだった。冷蔵庫の中の食品は想像以上に大丈夫のようだった。「外の世界」から物資の供給があるまでは、手元にある貴重な食糧を無駄にすべきではないと思った。

避難所は徐々に体制が整い始めていた。名簿が作られ始めた。時折配給があるが、十分な量ではない。当然のことながら、小さな子どもやお年寄りが優先である。長い時間、自宅にいるわけにはいかないが、自宅の冷蔵庫にあって調理が不要なものを少しずつ食べることにした。妻と交替で息子を自宅に連れて行った。ペットボトルに付着した泥を雑巾でふき取るように命じて、避難所に戻った。

しばらくして、避難所の外の異変に気がついた。中学校の敷地はなだらかな坂になっているが、人々が次々と列をなしてその坂を上って行く。妻が知り合いを見つけ、何が起きているのか尋ねた。そうすると、再び津波が襲来し、砂押川の堤防が決壊したという。決壊箇所は分からないが、危険が迫っている

ので高い所に退避するように、との指示が出されたとのことだった。ほぼ同時に避難所にも第一報が届いた。3階への退避指示が出た。筆者は指示を無視し、避難所の外に出て必死の形相で自宅に向かって駆け出した。背中に担いだ避難用品と一緒にパソコンが重かった。一瞬、ここで放り出してやろうかと思った。振り返ってみても妻はついて来ていなかったが、気にする余裕などなかった。何も知らない息子が自宅にいる。寒いので窓は全て閉じたままである。防災無線が聞こえるとは思えない。ペットボトルを拭きながら息子が死にでもしたら、それこそ自分の責任だと思った。玄関の扉を開け「津波が来る、逃げろ！」と怒鳴った。手元の荷物を持ってついてくるように命じた。朝、下見をした通りに坂の上に駆け上った。息が切れ、目が回った。「もし、ここまで水が来たら、向かいの建物の屋根によじ登ろう」と話をした。通りがかりに人に声を掛けられ、状況を尋ねられた。聞いていた通りの津波情報を教えた。情報提供のお礼として飴などをいただいた。素直に嬉しかった。

1時間ほど経った頃だろうか、相変わらず人通りは頻繁にあったが、行きかう方向がランダムになってきた。緊張感も感じられなくなった。はっきりとは分からなかったが、結果的に誤報のようだと判断した。何やらホッとすると同時にトイレに行きたくなってきた。坂を下りて自宅に向かう途中、声を掛けられた。息子の小中学校時代の同級生の母親だった。ご自宅に招き入れていただき、トイレを貸してもらった。普段とは違い、汲み貯めておいた貴重な水を分けていただいたのと同じことである。炊き出しとして用意されていたおにぎりも分けていただいた。さらに、緊急時には連絡先となってもらうことまで引き受けていただいた。人の情けのありがたさが全身に染みわたった。

午後、入試課長から携帯電話にメールが届いた。翌日11時から片平キャンパスで実施本部会議とのことであった。「近々、ライフラインが戻ることを前提として、個別試験を実施することを検討する」という。しかし、仙台空港、仙台港は津波で壊滅、石油コンビナートは火災で壊滅、食糧やガソリンの供給も断たれている。これに大きな余震が追い打ちを掛ける可能性もある。新たに火事が起こる危険性も高いと思われた。

#### 3. 4. 4. 一転…そして決着

翌、3月14日(月)の早朝、まだ暗い時刻に街灯が灯っていることに気づいた。夜が明け、周囲が明るくなるまで待って、妻と一緒に通りに出た。確かに電気が戻ってきていることを確認した。飲み物の自動販売機も稼働していた。家族の分、一緒に避難している人の分の温かい飲み物を購入して避難所に戻っ

た。

出勤のために身支度をしに自宅に寄った。今回は息子の自転車を借りることにした。3段変速である。ママチャリよりはずいぶんと具合が良い。出かけようとした直前、妻からの伝言で風呂桶に水をためておくことになった。上水道が破壊されているので通水はないはずだったが、マンションのタンクに溜まった分が残っていたらしい。電気が通ればポンプが動く。タンクの水がなくなるまでは水道が出るかもしれない、とのことであった。自分では思いつかなかったので、妻の機転に救われた形である。風呂桶が満杯になった頃、再び蛇口からは一滴の水も出なくなった。

自転車で約二時間弱の行程の半ばを過ぎた頃、入試課長からのメールが入った。「個別試験の実施は4月上旬、出勤には及ばず」との内容だった。ここまで来たのに引き返すわけにはいかないと思い、そのまま大学本部のある片平キャンパスに向かうことにした。仙台中心部を通った。閑散としているが、津波の危険も火災の危険も全く感じられなかった。多賀城に比べると別世界のようだった。

会議の後、川内キャンパスの入試センターまで足を伸ばした。主だった入試課職員は出勤していた。大学として個別試験を実施するとの発表があった以上、その時点で自分ができる仕事は何も思いつかなかった。箱単位でペットボトルに入った飲み物を買ってこいでいて、それが合同研究室に置いてあったことを思い出した。供出して入試課の皆に使ってもらうことにした。

避難所に帰った。食糧の供給状況がかなり改善されていた。外からの援助物資が入って来るあてはなかった。しかし、わずかな量ではあったが近所の被災したスーパー、菓子店から、被災を免れた倉庫に残った商品が時折提供されるようになっていた。この時期、各地域の避難所では相当に条件の違いがあったのではないかと思う。多賀城市は仙台のベッドタウンであり、比較的都市インフラが整備された地域である。孤立した状況で公的な備蓄に限度があったとしても、民間のリソースが潤沢に残っていた。この時、避難所でお世話になった店は決して忘れることがないだろう。営業を再開したら、真っ先に飛んで行きたい。おそらく、同じ思いを持つ人は多いのではないだろうか。

この頃から、福島第一原発の事故がニュースに頻繁に流れるようになった。夜にかけて緊迫した事態の様子が伝わってくるようになった。翌日は、原発事故関連の情報収集で気が一杯になっていた。テレビから入ってくる情報は非常に深刻だと感じられた。携帯メールを使って、原発の問題に詳しく知り合いに助言を求めた。

3月15日(火)の夜になった。避難所暮らしも5日目が過ぎようとしていた。原発事故に即応するためにはできるだけ避難所に残っている方が良いと考えた。しかし、多賀城市で備蓄していた灯油が底を尽き、夜になっても暖房が入れられないと通告された。衛生状態も限界に思えた。朝を待たずに自宅に引き上げることにした。

次に職場からの連絡が入ったのは翌日、3月16日(水)の夜であった。方針が一転、「後期日程個別試験は中止、センター試験を主たる選抜資料として合否決定を行う」との決定がなされ、すでに発表されたとのことであった。筆者はこの間の経緯については知らない。ただし、後で入試課職員に聞いたところでは、先の発表に対して、復旧していた入試課の電話に問合せや抗議が殺到したという事実もあったらしい。結果的には、この変更が東北大学の名誉を救うことになった。もちろん、その時点で予見できたことではなかったが、4月7日(木)の深夜にはマグニチュード7.4、震度6強の現時点までの最大余震に見舞われた。中には3月11日の本震よりも激しい揺れを感じたという人もいた。広範囲に及んだわけではなかったが、この余震で新たに大きな被害をこうむった地区もあった。仙台周辺は再び停電、断水に見舞われた。徐々に復旧しかかっていた鉄道も、再び不通となった。個別試験を強行していたら、試験場までたどり着けない受験生が続出して大混乱に陥るのは必定であっただろう。

入試センター長からの電話がようやくつながり、「後期日程試験を実施する予定の学部との連絡のために、翌日は出勤して待機するように」との指示があった。福島第一原発までは約100kmの距離がある。原発が爆発したときによほどの強風がこちらに吹いたとしても、「自宅にたどり着いて最期のときを家族と一緒に迎えることくらいはできるだろう。」そんな考えが頭をよぎった。

## 4. 教訓

### 4.1. 復旧へ

電気、通信の復旧とともに、入試の実務は思った以上に順調に進んだ。当初は不可能と想定していた大学入試センターとのデータの授受も可能となり、個別試験が取りやめになった以外は例年に近い手続きで入試業務を進めることが可能となった。筆者も職責上の役割をこなすために断続的に職場に通った。交通手段の中では、タクシーの復旧が早かった。筆者の通勤の便宜に関しては、かなり弾力的に対応していただいた。職場で待機していた17日には徐々に天気が悪化した。昼過ぎから横なぐりの雪が降ってきた。自転車を職場で預かつ

てもらい、帰宅のためにタクシー券を支給してもらった。無線による配車は復旧していなかったが、空車で流していたタクシーを簡単に拾うことができた。運転手は、偶然にも同じ多賀城市内に在住の人であった。自宅が津波の被害に遭い、この営業車に寝泊まりしているという。名刺をもらって、何かあったら連絡するという約束を交わした。

帰宅すると、妻が高揚した様子で筆者を出迎えた。仙台市中心部に在住している友人から連絡があり、「一家で風呂に入りに来ないか」との招待を受けたという。妻の学生時代からの旧友で、家族ぐるみでお付き合いいただいていた友人である。彼女のお宅の一带では断水も起こらなかったという。しかも、オール電化住宅なので、ガスの供給がなくとも風呂が沸かせるのだという。ご主人は、まだ一家で避難所のお世話になっていた頃、心配してバイクを飛ばして様子を見に来てくれたことがあったのだそうだ。筆者は職場に行っていたので、その時には会えなかった。早速、つい先ほど知り合ったばかりのタクシー運転手の携帯電話を鳴らした。1週間ぶりの風呂を堪能し、山ほどたまった洗濯物を片づけた上に温かい夕食まで御馳走になった。往復 7,000 円以上かけてのもらい湯だったが、豪華な温泉に宿泊する以上の温かさとありがたさであった。

宅急便が復活した。自宅までの配送はできないが、営業所まで取りに行けば荷物を受け取ることが可能だという。東京に住む妻の叔母がいち早く必要な物資を選んで送ってくれた。19日(土)には営業所に荷物が到着したとの通知があった。この時も先日のタクシーに活躍してもらった。

震災後は、このまま破滅に突き進んでいくのか、それとも、復旧、復興に向かうのか、ずっと気持ちが揺れ動いていた。1週間ぶりの風呂と温かい食事、そして、「外の世界」から送られてきた支援物資を受け取ったこの瞬間、自分のいる場所が世界とのつながりを取り戻しつつあることが実感できた。そして、初めて「自分たちは元の生活に戻っていくのだ」、そう確信した。

## 4. 2. パラレルワールド

震災から1週間ほどの間の出来事を思い返して綴ってきた。職業人としての自分は100%ほめられたものではなかった。同時に家庭人としての自分も100%ほめられたものではなかった。震災後、自分たちは「外の世界」から切り離され、補給のない閉じられた世界の中での耐久消耗戦を強いられていた。さらに、自宅はより危険な場所にあり、職場はより安全な場所にあると感じていた。筆者の気持ちの中では、常に「家族を取るか、仕事を取るか」と迫られていた気がする。常に揺れ動く自分がいた。このまま破滅に突き進むのならば、



仕事を投げ出し、家族と一緒に「外の世界」への逃避行を企てていただろう。自分は責務を果たさなければならないとしても、せめて、家族だけは「外の世界」へ逃がすべきかどうか、と考えた。情報は限られていた。その中で的確な判断を下すのは本当に難しかった。実際、4月7日の最大余震の後、妻子は1週間ほど遠く離れた九州の実家で過ごしてきた。ただ、この時期になると生活インフラがかなり改善されており、ガソリンも手に入るようになっていた。食料品なども少しずつ手に入るようになっていた。交通手段も回復してきていたので、「外の世界」への脱出という感覚ではなく、気分的には「帰省」に近かった。

この間、入試課の職員は自らの職責を果たすために懸命に働いていた。少なくとも、筆者の目にはそう映った。自宅に幼い子どもを3人も抱えた人、高齢者を抱えながら筆者と同じくらいの遠距離を毎日自転車で通ってきた人、一人ひとりの状況を知り、その心情を思うと本当に頭が下がる。受験生の関係者からの抗議の電話の中には、電話で対応している相手が地震で被害に遭った被災地の真ん中にいる「被災者」であり、同じ「人間」であるということは一切配慮していないような内容も多かったという。心の内には、日に日に澱のようにストレスが貯まって行ったことだろう。例年の作業に加え、やらなければならない業務は幾重にも増えて行った。例年ならば3月末で「区切り」があるが、それもずるずると先まで引きずって行くこととなった。それでも、彼らは耐えた。一切職責を投げ出さなかった。心からの畏敬の念を禁じ得ない。現場はこういう人々の思いと努力で支えられている。もう一度、自らを省みると、襟を正さなければならないという思いが湧き上がってくる。

一言で被災地と表現するが、その実態には大きな格差がある。そして、それらは交わることがない「パラレルワールド」を形成している。今回の震災においては、津波の被害の有無が大きかった。津波の被害を直接こうむった方々の中には、命が救われたとしても未だに復旧、復興のプロセスに入ることが出来ない人たちもいる。つい先日出会った高校生は、最近になってようやく仮設住宅に当選し、家族と一緒に暮らせるようになったという。しかし、通学列車として使っていた鉄道の復旧は見通しが立たず、毎日、6時半には学校に向かうバスに乗らなければならないのだそうだ。それでも、時間は皆と同じように進む。彼は、その環境の中で勉強を続けなければならない。もちろん、それ以上に気の毒な状況の人たちも多いのだが。

他方、地震による被害を受けたとしても、目前に津波の痕跡がない地域も多くは、ほとんど震災の影響を感じずに生活できるまでに回復してきている。時折、大きな余震があるが、それ以外は震災があったことを忘れて暮らすことさ

えてできるのではないかと思うくらいである。

筆者自身はその中間にいるような気がする。中途半端な「被災者」である。本当におかげさまで、生命、財産に被った被害はなかった。しかし、自宅を出て少し歩けば、瓦礫の山が見えてくる。海の方へ行けば、津波の爪痕が色濃く残っている。「外の世界」の時間は、震災とは無関係にカレンダー通りに流れていく。周囲に残る震災の傷跡に向かい合うべきなのか、日常の流れを早く取り戻すべきなのか。その戸惑いは、数カ月間は続いていた。そして、一人ひとりが意識する、しないに関わらず、依然として「外の世界」から隔絶された「パラレルワールド」は存在している。

#### 4. 3. 大規模災害の下での大学入試

大規模災害の現場には情報が入って来ない。それが、この度の震災を体験してみても身に染みて分かった一つの事実である。情報の制約は判断と行動に決定的に影響する。情報の遮断、通信の途絶、交通手段の喪失、先の見通しも立たない。その中で、何を優先すべきなのか。

東北地方太平洋沖地震は入試実施日の前日に発生した。そのタイミングが決定的な鍵を握っていた。もしも、入試当日の試験実施中の時間帯であったら、その場で試験の中止という決定を下すことは可能だっただろうか。何千人に上る受験生の安全確保と避難場所への誘導がスムーズに行えただろうか。それらが無事に済んだとしても、後日、どこまでの資料で合否を判断すべきなのだろうか。地震発生のタイミングが、試験が終わった後だったら、どうだったのか。答案等の合否判定資料が完全に失われたり、取り出せない場所に残されてしまった場合にはどう判断すべきなのだろうか。通信が途絶した状況では、誰が何をどう判断してよいのか。課題は山積している。

ここで忘れてならないのは、「人の命は地球よりも重い」というあまりにも言い古された警句だと筆者は考える。被災の現場から、自らの命を顧みず他人の命を救った人にまつわる様々なエピソードが報道されている。命と引き換えの命。それは、何とも形容しがたい尊いものである。

大学入試はどうか。当然、命に換えるほどのものではあるまい。しかし、その社会的な影響力は不自然に思えるほど大きい。大学入試の現場にいる当事者は、痛いほどその事実を感じている。だから、おそらくは内心の葛藤の中で、職務を出来るだけ優先しようとして行動する。しかし、その思いは周囲にどれほど理解され、共有されているのだろうか。宮城農業のエピソードを思い起こすと、大津波に襲われた中で、実際には、かなりの際どい橋を渡った末の生還

劇だったのではないのだろうか。様々な好条件に的確な判断が重なった末、結果としてその場にいた全員の無事が確保されたように感じられる。東北大学入試センターの建物も日常的に人が出入りして執務を行うスペースは無事であった。しかし、入試関連資料を保管する金庫がある奥まった場所のダメージはかなりのものだった。万が一、誰かが何らかの事情で危険を顧みずに物を取りに入ったときに決定的な余震に見舞われたとしら…。そういったケースも考慮に入れておかなければならない。

プライオリティに対する共通認識は極めて重要だ。大災害の現場では、プライオリティに関する判断の誤りが原因で誰かの命が失われかねない危険がある。現に、津波で亡くなられた方の話を伺うと「まだ大丈夫」と思って物を取りに行ったために逃げ遅れてしまったというようなエピソードをよく耳にする。もちろん、世の中には尊い命と天秤に掛けなければならない、重たい職責もある。しかし、大半の事柄はそれには該当しないはずだ。特に、一度日常生活と隔絶された世界に置かれてしまうような状況の下でも、「外の世界」の価値観をどの程度忠実になぞる必要があるのだろうか。日常生活から切り離された場面において、大学入試とはどれほどの重みを持つものなのだろうか。そういった点について、一度整理して考えておく必要があるのではないだろうか。

筆者の個人的なストーリーは格好の良いものでも特別なものでもない。この度の東日本大震災においては、比べ物にならないほどドラマチックで感動的な経験をしてきた人が、数え切れないほどいるはずだ。したがって、特別に価値があるために記録しておくべき話だとは思っていない。ただ、忘れて欲しくないのは、この震災の中、一人ひとり全ての人にそれぞれ固有のドラマが生まれ、語り継がれる貴重な経験が存在したことだ。筆者の経験は特別なものではないからこそ、ありふれた典型例として記録に止めておく意味もあるのではないかと考えた。

日常、自然に動いているように見える様々な営みの裏側に、それを支えて動かしている「人」がいる。そして、それぞれ命を持ち、家族や財産を持っている。極限状況では、おのずと普段は見えない「限界」として「人」が決定的な要因として浮かび上がってくる。やらなければならない仕事とそれを支える人。そしてそれぞれの置かれた状況。大災害という特殊な条件下では、「人」の条件を表に引き出した上で適切なプライオリティを考え、適切な判断を下さなければならない。災害の真ただ中であって、被災地は「外の世界」から遮断され、隔離されてしまう。「外の世界」からは見えない状況がある。同時に「外の世界」もその瞬間は被災地から隔絶された別世界として存在してしまう。ま

ずは、世界のつながりを取り戻すことが第一だろう。その前提がなければ、日常をカレンダー通りに統一された原理原則で動かしていくことはできない。修復には時間が掛かる。焦って無理を通そうとすれば、誰かがその犠牲になりかねない。強いて教訓と言えば、それが教訓なのではないだろうか。

## 5. むすび

震災後しばらく経って、仙台の街の雰囲気が変わったように感じることもある。例えば、妻と一緒に買い物に出たときなど、ふと気が付くと妻が見知らぬ人と話し込んでいる。以前からの知り合いなのかと思って尋ねてみると、どうもそうではないらしい。自然に同じ苦難を乗り越った連帯感のようなものが生まれたのだろうか？筆者にも原風景としての記憶がある。筆者が育った北海道の田舎では普通に見られた光景だった。これだけの目に遭ったのだから、少しは「良かった」と思えることもあって欲しい。もしも、震災をきっかけとして、抜きがたく出来上がってしまった人と人との垣根がわずかながらも低くなれば嬉しい。筆者のような、いい年をした男は照れがあって、行動に移すことは難しい。その点、つくづく女性は偉いと感じる。

手あかがついた表現だが「絆」という言葉も悪くない。本当に様々な方にお世話になった。具体的なエピソードは思いつく限り、拾い上げたつもりだが、書き切れなかったことも多い。震災翌日の東京消防庁についてはすでに言及したところだが、他にも様々な形で様々な方々からの支援を受けた。筆者の自宅周辺では、水道の復旧にかなりの日数が掛かった。自宅に通水があったのは3月30日（水）、震災当日から3週間近くが経過していた。その間は給水所に頼って生活していた。よくお世話になったのは、広島県竹原市からの給水車であった。震災当初はガスの復旧には数カ月は掛かると言われていた。長い間、風呂に入れず、まともな料理を口にできないことを覚悟した。ところが、4月5日（火）にはガスが復旧した。嬉しかった。自宅で風呂が沸かせるようになり、完全に日常生活を取り戻した。沿岸部にある仙台市のガス工場は壊滅的な被害に遭い、未だに復旧していない。現在、供給されている都市ガスは新潟からパイプラインで引いたものだと聞いている。自宅を訪れてガス栓を空ける作業に当たってくれたのは東京ガスの職員だったそうだ。全国からボランティアが多数集まっていた時期、警備に当たっていた警察官の腕章には「愛知県警」と書かれていた。多賀城駅脇の空き地に設置されていた仮設浴場は、沖縄駐屯の自衛隊によって運営されていた。

大震災の後、筆者と筆者の自宅周辺に住む人々生活は、日本中の見知らぬ人

たちに支えられて日常を取り戻して行った。少しずつ、つながりを取り戻すことによって、「外の世界」との境界が次第に溶けてなくなって行った。様々なエピソードから教えられたその事実は、感謝の気持ちとともに深く心に刻んでおきたい。同時に、一日も早く全ての人が震災以前に近い日常を取り戻す日が訪れることを心からお祈りする次第である。

(初稿原稿受付日：2011[平成 23]年 9 月 8 日)

### 参考文献

Kolen, M. J. & Brennan, R. L., Test Equating: Methods and Practices. NY: Springer, 1995..

倉元直樹「個別大学の追試験における得点調整方法に関する一提案ータッカーの線形等化法を用いてー」『日本テスト学会誌』, No.7, 2011, 67-83 頁

倉元直樹・安藤朝夫「平成 22 年度入試における東北大学の新型インフルエンザ対策について」『大学入試研究ジャーナル』, No.21, 2011, 149-157 頁

西郡大・倉元直樹「新聞記事からみた『入試ミス』のパターンとその影響の検討」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』, 第 4 号, 2009, 39-48 頁

